

戦後沖縄における「政治と文学」 —『琉大文学』と大城立裕の文学論争—

呉 屋 美奈子*

"Politics and literature" in postwar Okinawa: Focusing on *Ryudai Bungaku* writers and OSHIRO Tatsuhiko

Minako GOYA

抄録

琉大文学論争とは1950年代において大城立裕が『琉大文学』を批判したことに端を発したもので、大城は『琉大文学』の政治に偏る文学姿勢に対して文学の立場から批判した。それに対し『琉大文学』同人たちは、現在に至るまで大城立裕に対抗し続けている。

この論争は一言で言えば「政治と文学」についてであり、戦後沖縄文学において極めて重要な思想対立であった。半世紀以上も続く事になったこの論争は、今現在決着が付かない現状からも分るように、いわば文学表現論の違いであり、どちらが正しいと言えるようなものではない。

しかし、論争が再燃した昨年一年間の大城と元『琉大文学』同人たちとの一連のやり取りを見ると、残念ながら論点の摩り替えや読み違い、又は時間の流れの為による勘違いなどが見られ、この節目において、整理しなおす必要があると考える。本稿では、『琉大文学』と大城立裕との関わりを述べ、戦後沖縄文学における文学論争のあり方について考察する。

Abstract

The dispute known as the *Ryudai Bungaku Ronso* was originated in the 1950's, when OSHIRO Tatsuhiko criticized the writers from *Ryudai Bungaku* (the University of the Ryukyus Magazine on Literature) as being too politically oriented. To Oshiro, who believed that literature for its own sake should be the purpose, not means, the magazine was apparently trying to make literature serve politics. The *Ryudai Bungaku* writers returned fire, and the rivalry thus began still continues today.

This half-a-century old schism is undoubtedly the most important battle of ideas in the field of post-war Okinawan literature, however, since should-be relation between politics and literature has always been the focal point, one cannot prove which camp is right and which wrong. This may explain the prolonging nature of the controversy.

We saw last year the revival of the dispute. Regrettably, a close look at the exchange of fires for the last one year shows that the renewed battle is embroiled with evasion tactics, misinterpretations, or false memory which is caused by sheer oblivion. It would be necessary to clarify and sort out the points of arguments at this juncture. In this essay, the author discusses the relation between "*Ryudai Bungaku* writers" and Tatsuhiko Oshiro, and shed some light on the patterns characteristic to disputes over postwar Okinawan literature.

* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程
Doctoral Program
Graduate school of Library, Information and Media studies, University of Tsukuba

1. はじめに

昨年終戦 60 周年を迎えた沖縄では、さまざまな角度から戦後を振り返る催しや特集、イベントなどが目白押しであった。文学界もまた、こぞって新聞雑誌などが戦後沖縄文学特集を組んだ。その中で再燃したのが、『琉大文学』論争である。

そもそも『琉大文学』論争とは 1950 年代において大城立裕が『琉大文学』を批判したことに端を発したもので、大城は『琉大文学』の政治に偏る文学姿勢に対して文学の立場から批判した。そして、この論争は 50 年経った去年に再燃した。

この論争は一言で言えば「政治と文学」の関係についてであり、戦後沖縄文学を貫流する大きなアポリアであった。半世紀以上も続く事になったこの論争は、50 年以上たっても決着が付かない現状からも分るように、いわば文学表現の方法論の違いであり、どちらが正しいと言えるようなものではない。

この論争に関する先行研究としては、鹿野政直の「『否』の文学——『琉大文学』の航跡」（『戦後沖縄の思想像』朝日新聞社 1987 年所収）や、新城郁夫による「戦後文学覚え書き 『琉大文学』という試み」（『沖縄文学という企て』インパクト出版会 2003 年所収）があるが、これらは『琉大文学』の存在価値や意義を探ることを目的としたものであったので、論争について触れられているものの、詳しく分析したものではない。また、最新のものでは比屋根薫が『琉球新報』の文芸時評欄で折に触れて『琉大文学』論争を取り上げている。比屋根は、『沖縄タイムス』2004 年 11 月 26 日付の記事で、元『琉大文学』同人の新川明と大城を対比させつつ「沖縄をめぐる言説のなかの大城立裕をなんとか包括したいと思ったことがある。しかし、反復帰論や反国家論¹でどうにかなるものでもなかった。」（『沖縄タイムス』2004 年 11 月 26 日）とし、「大城立裕批判は、現代思想の最前線のこの場所まできてやっと可能なのだと思える」と結んでいる。²当事者としては、新川明が「大城立裕論ノート」（『沖縄・統合と反逆』筑摩書房 2000 年）を発表している。

先行研究の中でも、特に鹿野は 1950 年代における初期の『琉大文学』の軌跡を扱っており、大城対『琉大文学』同人の間でなされた論争の時期と重なる。また、鹿野は同時期に大城立裕に関する論文「異化・同化・自立」（同上）も発表している。「『否』の文学——『琉大文学』の航跡」は、『琉大文学』の創刊から丁寧に分析されて

おり、この論文で鹿野は、『琉大文学』を「その名を知るほどの大ていのひとから、一種の畏敬をこめて語られる雑誌との観があった。」と述べている。大城の姿勢については、「異化・同化・自立」³の中で「“先輩”作家として、『琉大文学』の問題提起をいちばん正面から受けとめ、それゆえ同人たちにもっとも親切であるとともに辛辣でもあったとみえる」と評している。

にもかかわらず、論争が再燃した昨年一年間の大城と元『琉大文学』同人たちとの一連のやり取りを見ていると、残念ながら論点の摩り替えや読み違い、又は時間の流れの為による勘違いなどが見られる。当事者同士の論争では、客観的に自体を把握できないのも無理はない。ましてや、50 年以上前の論争となると思い違いもあると共に、自分の過去の仕事に対しての思いいれもいっそう強くなっているということもある。

『琉大文学』と大城立裕の論争がそもそも「政治と文学」に関するものであったという点を考慮すると、沖縄における政治的な背景、特に党派性や派閥等の問題が根本にあることは明らかであるが、本稿では、この部分を次回への課題として捨象し、『琉大文学』同人と大城立裕との相違を、それぞれの文学的な方法論の違いから、論争史を捉えていく事とする。

沖縄文学の土壌を作った『琉大文学』同人の活躍、沖縄初の芥川文学賞受賞作家となった大城立裕の果たす役割は、どちらも現代の沖縄文学を語る上で重要なものであり、その立場を確認する為にも、歪曲しがちな『琉大文学』同人と大城立裕に対する評価を客観的に整理しなおす事に本論の目的がある。筆者は「大城立裕書誌」作成というライフワークともいえる研究の中で、大城立裕の思想を終戦直後のものから最新のものまで、目を通し研究してきた。『琉大文学』論争史を、当時の雑誌本体に振り返り、客観的な立場で整理したいと考える。

2. 琉大文学と大城立裕

『琉大文学』とは、1953 年に琉球大学の学生を中心とし、創刊された同人誌である。

一方、大城立裕は、1925 年沖縄県中城村出身で、1967 年米軍統治下において「カクテル・パーティー」（『新沖縄文学』4 号 1967 年 2 月）により第 57 回芥川文学賞を受賞した戦後沖縄を代表する作家であり、2002 年には、勉強出版から『大城立裕全集』（全 13 巻）が出版されている。大城は、上海にあった東亜同文書院大学⁴の出身で『琉大文学』の同人ではないが、『琉大文学』が創刊された当時、既に『月刊タイムス』や『沖縄ヘラル

ド』、『沖縄タイムス』などで掌編小説を発表し、活躍していた作家であった。更に1953年6月からは新聞連載小説『沖縄タイムス』に「流れる銀河」(全101回)を連載していた。『琉大文学』創刊時大城立裕は28歳であり、大学生の『琉大文学』同人からは少し年上の先輩になる。

大城立裕が文学に目覚めたのは敗戦後である。沖縄では戦後久しく作家は育たず、“文学不毛”と自らを自嘲するような風潮があった。

大城立裕は文学をはじめた頃を回顧録『光源を求めて』⁵の中で次のように述べている。

世間に本といえば、米軍基地から流れてきた英語の雑誌やペーパーバックだけが氾濫している時代であった。

戦後の沖縄では、すべてが燃えてしまったゼロからの始まりだった。

ところで、1945年敗戦当時、沖縄のメディアは『うるま新報』⁶など広報誌的なものしか流通しておらず、発刊当時の『うるま新報』は、戦争で残った活字をどうにか集めて印刷したものであり、作家たちの作品発表の場ではなかった。戦後、沖縄で初めての小説の発表の場となったのが1947年に発刊された『月刊タイムス』や『うるま春秋』⁷という雑誌である。これらは、民間の商業雑誌がはじめて文学に力を入れ、懸賞をつけて小説の募集を行ったものであり、この時期になってようやく沖縄で文学活動が始動しはじめたと言ってよい。1948年になると『沖縄タイムス』や『沖縄毎日新聞』⁸といった新聞が謄写印刷で発刊された。そして1949年、『月刊タイムス』の作品募集の懸賞に大城立裕が小説を投稿し、大城立裕のデビュー小説となる「老翁記」が掲載された。大城立裕が更に文学に力を入れ、初めて「文藝サロン」の同人となったのが、1950年25歳の時である。雑誌はガリ版刷り、仮綴の簡単な製本のものであった。そして、このころようやく、同人誌や商業誌などでの文学作品の発表の場を得ることが出来た沖縄では、文学も活性化してきた。そこで登場したのが『琉大文学』である。当初の同人たちの意気込みをみると「吾々は純文藝え(ママ)の強い希いで「琉大文学」の発刊を意図し」(1号)、「より充実した純文芸誌として、琉球の文化的前進に聊かでもプラスになるように努めたい」(同)、「琉球における唯一の、そして独特の純文芸誌——。である」(2号)等、「純文学」(芸術至上主義的作品)を中心に既存の文学とは違ったものを産み出そうという姿

勢が感じられる。この時期は、文学者たちが沖縄文学⁹のアイデンティティを模索していた時期であり、『琉大文学』同人が積極的にそれに取り組んでいたのと言える。初期の執筆メンバーの中心となったのは、新井暁(新川明)、いれい・たかし、川瀬信(川満信一)、池澤聡(岡本恵徳)らであった。また後には、儀間進、中里友豪、豊川善一、平山良明、崎原盛秀、清田政信なども加わり、戦後沖縄において重要な位置を占めるようになる文化人を輩出した。『琉大文学』において、ここで言われる「政治と文学」論争に関わったのは、初期メンバーに限られる。特にこの論争の中心となる新川明は、『琉大文学』でもリーダー的な存在であり、『琉大文学』脱退後も、沖縄の政治的状況について積極的に発言していく。中でも、1960年代後半に日米両政府が沖縄返還政策を打ち出してきた頃、新川が中心となって唱えた「反復帰論」は、従来の復帰運動を問い直す思想として沖縄県民に大きな影響を与えた。

『琉大文学』は、創刊当初芸術至上主義を唱え、詩と創作の発表の場であったが、第6号(1954年7月)からそれまでの方向を転換し、創作活動より政治問題に関する批評を多く扱うようになった。当時沖縄では、1953年に「土地収用令」が公布され、沖縄の土地の強制収容が始まっている。米軍は、土地の強制的収容に抵抗する住民に武装兵をさしむけるということもあった。このように『琉大文学』転換期における米軍政府による沖縄支配は弾圧的であり、それに対する住民の不満は大きかった。そして、政治的な状況だけではなく、文学状況也非常に困難であったことは、『琉大文学』第7号(1954年12月)に掲載された川瀬信(川満信一)による「沖縄文学の課題」の中の以下の一文からも分る。

真実が真実で通らなくなるところにおいて、真実を追究する者はたちまち破局の淵に追いこまれる。

文学が真実を等閑に付して成り立つものでない限り、現在、私達のおかれている社会組織下において文学は成り立つ余地をもたない。真の文学を望むものはその困難に耐えかねて文学を放棄し、或る者は官権の目をおそれて、抽出しの中や火鉢の中に彼らの苦作をつつまなければならぬ。(中略) いづれにしても私達はせめて発表だけでは他からの拘束を受けないように解決する必要がある。

川満の述べるように『琉大文学』を取り巻く状況は、厳しいものであった。米軍の検閲により、当時大学生であった彼らにも自由な創作活動は許されなかった。これ

に対し、『琉大文学』同人たちは徹底的に「政治」に対して「文学」で対抗するという強固な姿勢をとり、同人たちは日本本土で既に実践された社会主義リアリズムを積極的に取り入れるようになる。

その後、川満の憂慮どおり新川明の詩「「みなし児」の歌」『琉大文学』第8号（1955年2月）、同じく新川明の詩「「有色人種」抄」『琉大文学』第11号（1956年3月）、浜丘独（仲宗根孝尚）の詩「息子の告訴状」（同）などが、反米的であるという理由から8号が『琉大文学』の回収、11号が発刊停止処分という事態にまでなっている。

『琉大文学』同人の不満の矛先は既存の作家にも向けられた。『琉大文学』第6号（1954年7月）において新井暁（新川明）が既に沖縄詩壇において代表的な詩人として活躍していた船越義彰¹⁰に対して、「船越義彰試論——その私小説的態度と性格について」という論文を発表した。新川は、作家個人の内面を表現する創作傾向にあった船越を「じょ情派（ママ）」と分類し、「オセンチな古いリリシズムだけで氏の詩が成り立っている」と痛烈に批判した。また新川は「じょ情派」に対し、「詩的思考や感動を対象たるべき外部社会の現実面から詠おうとする」立場を「外向派」と定義し、「じょ情派」が「外向派」よりも高い評価を得ているという実態は船越が沖縄の詩壇で評価される所以とし、このことは「沖縄詩壇の貧困と低調を意味する」と言っている。伝統的に「じょ情派」が評価される風潮を強調し、そのような傾向を批判している。新川は、その言葉どおり「外向派」的立場で「「みなし児」の詩」「「有色人種」抄」を発表していくこととなる。

『琉大文学』は、第7号（1954年12月）において「戦後沖縄文学の反省と課題」という特集を組んでいる。その中で「戦後沖縄文学批判ノート」（新川明）「沖縄文学の課題」（川瀬信<川満信一>）らの評論で、山里永吉、新垣美登子、太田良博、大城立裕という既存作家の文学のあり方を批判していくのである。

「戦後沖縄文学批判ノート」の中で新川は戦後の文学を以下のように振り返っている。

虚脱にしろ混とんにしろこの十年という時日の流れは決して単なる時間の無意味な連鎖ではなかったし、一日一日がきびしい生活の集積であり、その文学もこれからの一日一日をきびしく生活した人の文学であるべきだった。

更に吾々は多かれ少なかれ戦争という冷厳な経験を経てきている以上、すぎて来た自己に対してより厳格な

批判と反省をなし、強じんな吾々の文学を創らなければいけないだろう。

そして、

とにかく、その世代の人たちの中に、新しい文学を前え（ママ）押し進め、新しく現実を切り拓いていくという自覚された立場をもつ批評家はおろか、作家さえ居らぬ沖縄であればこのことは後から進む僕たちにとって悲しむべきことだ。（中略）いずれにせよ、僕たち若い世代は三十代の一部を含めて四、五十代の人達に新しい文学を期待してなどいないとことだけはたしかなことである。このことは僕たちにとって、本土の古い世代を含めて自覚的な文学者たちの間で、ようやく具体化され、深化されつゝある国民文学運動などをおもいうき沖縄が南海の孤島というだけでなく本土と切り離されて占領下の社会にあるという点でも、二重三重の悲しみであるのである。

と既存作家たちの存在を否定した。新川の結論は以下の通りであった。

吾が沖縄が全島そのまゝ太平洋戦争の激烈な戦場となったのであれば、吾々の創るべき文学はより冷厳な思想と、今日の問題意識によって把握し、抉出しなければならない。

更に太田良博「黒ダイヤ」、大城立裕「老翁記」、冬山晃「帰郷」に対して、私小説性傾向が強い作品であるとして名指しで批判した。当時、小説の発表誌が充分でなかった傾向にあった沖縄では、新聞が主な作品発表の場であり、既存作家が通俗小説を発表することに対する新川の不満は大きかった。当時において、既に沖縄においては認められた存在であった彼らに対して、新川のような批判をする者はいなかった。その中で、新川のこの批評は、衝撃的であり沖縄文学に対して大きな影響を与えた。

3. 『琉大文学』批判と反論

大城立裕は、初期の『琉大文学』に4度に渡って寄稿を行うほか、座談会等にも出席している（創刊号・5号・7号・9号）。沖縄県内で既に同人誌や新聞で活躍していた大城が、学生の同人誌に寄稿しているという事からも、大城の『琉大文学』に対する期待は大きかったと思

われる。

初めに寄稿したのは創刊号であり、「文学的思春期に」というエッセイである。

作家と呼ばれるにはまだ青く、だけど沖縄ではもう祭り上げられてしまっている私は、文学をやる者としてその思春期にあると思っている。

という出だしで始まるこのエッセイでは、大城自身の文学に対する意思表明を書いたものであった。この中で大城は、以下のように述べている。

考えてみると、ずい分遠い道だ。歴史を読み、古典を読み、新聞を読み、人を聞き、方言に翻訳して表現し——これから創造されねばならぬ仕事が多い……

これらは、作家として未成熟である自分を認め、自分に対して課した課題であった。

そして、『琉大文学』第5号（1954年2月）の「現段階の言葉」という小論で初めて『琉大文学』の作品について意見をのべたのであった。この小論では、4号までに発表された創作に対して作品ごとに短い批評をつけ、全体的には作品らしい作品がないという見方をしている。

その後、7号（1954年12月）で組まれた「戦後沖縄文学の反省と課題」特集で意見を求められた大城は、「これからだということ」という短文を寄せている。他の寄稿者は、太田良博、呉我春男、船越義彰、嘉陽安男等といった、当時の沖縄文学界を代表する面々であり、各々がそれまでの沖縄の文学に対する問題点を挙げている。その中で大城は、沖縄文学の反省や課題についての言及は避け、沖縄文学自体が「これからだということ」と述べている。大城は、当時において沖縄文学には反省する材料がない、つまり文学自体がまだ育っていないという中で反省するという事が不可能であり、これからその材料を作っていかなければならないと述べているのである。¹¹

その後、『琉大文学』はそれまでの作品発表としての芸術志向の雑誌から脱し、批評や政治的な意図を含んだ詩の発表に転身していく。9号（1955年7月）で大城は「批評と作品と」¹²を寄稿し、池澤聡（岡本恵徳）の「空疎な回想」（のちに「ガード」と改題）に対する意見を述べている。

大城立裕が、「政治と文学」について言及したのは、『琉大文学』が政治的弾圧により休刊を余儀なくされた

のち、再刊された時であった。大城立裕は、「主体的な再出発を」『琉大文学』2巻2号（1957年4月）というエッセイを寄せている。「文学的思春期に」と「主体的な再出発を」は、両方『沖縄文学全集』¹³の評論編に所収されている沖縄文学史においても重要な論考である。その中で大城立裕は『琉大文学』のそれまでの活動を見直し、これからあるべく姿について述べた。このことが、『琉大文学』（新川明）対大城立裕との間に文学論争を引き起こす事になる。

双方の意見をまとめてみよう。大城の意見から見えてみると、きっかけとなった「主体的な再出発を」では、

六号で「塵境論」（川瀬信）と「船越義彰試論」（新川明）とを発表して僕等をおどろかせたあと、七号で、「戦後沖縄文学批判」を特集して、大きな足跡をきざみました。ぼくはこの特集を沖縄文学史に残る仕事だとして、同人諸君にもつたえました。一世代先立つぼくらの作品を整理してくれたからです。かなり光った分析でありましたし、文献として価値を認めたのでした。

と『琉大文学』の批評力に対して、一応の評価を与えている。確かに、当時の沖縄文学の世界では、『琉大文学』が行ったほどの批評はなかった。一方小説への評価は、

文学はもはやそのみのためのものでなく大衆のためにあらねばならない、という論をいちおうみとめるにしても、その論にもとづく作品はあまりに文学でなさすぎました。

文学手法は、個人個人のものであるという立場の大城は、『琉大文学』が理想とする文学の主張は認めたとしても、ではその方法で本当に文学が成立するのかという問題に、『琉大文学』自信が応えていないと指摘している。それはまた、『琉大文学』の作品の拙さを指摘するものでもあった。更に、

逆説めいたいいかたになりますが、今日までの「琉大文学」は、政治的にはいざ知らず文学的には何ら有害な（有害なというのは当局の言い方でしょうが、なんなら、「有効な」といってもよい）ものではなかった。それが有害であったのはむしろ自己内部に対してであったといえましょう。今度の転機において諸君は、そのことを反省してみる試練に立たされていると思います。

と主張する。政治問題に偏向しすぎた『琉大文学』は、もはや政治的主張のみが先行し、『琉大文学』の目指した新しい文学や独自の文学を提示したものではなかったとの見方である。

これに対し、新川は、積極的に反応していく。『沖縄文学』第2号（1957年12月）に「文学者の『主体的出発』ということ——大城立裕氏らの批判に応える——」を發表し、極めて素早い対応をとっている。

この島のこれらの人たちの思想は、政治と文学の関係を知らうとせず、単純に両立させて割り切って考えているところから生まれているのであり、一見して文学の普遍的な可能性を装いながら、極端な閉鎖性と狭隘性を文学に導きいれているのである。

という批判の「これらの人たち」というが後の文脈からも大城を指しているのは言うまでもない。更に、大城の批判に対し、

『その裏づけとなるべきいくばくの作品も残していない』のは事実である。しかし、当時の琉大文学同人たちの作品が大城らの作品より劣っていなかったのもまた事実であった。（小説、評論、詩すべてにおいて）。

とも述べている。大城を納得させるような作品を残していないのにもかかわらず、「大城らの作品より劣っていなかった」と断言するところに、何としても既存作家を認めないと言う若き気概が感じられる。新川明は、政治問題に踏み込まず、安全な位置で大衆向けの小説作品を書く既存作家に対し大きな不満を持っていた。そのような既存作家の態度に比べると、『琉大文学』同人の実践の方が優れているという自負があったのだろう。新川は、当時の政治的、社会的状況と文学を関連付け、自らの文学を創り出して行くことこそ文学であると反論しているのである。

沖縄国際大学教授の大野隆之は、当時の新川の大城に対する不満を以下のように分析している。

新川の批判は多岐に及ぶが、純粋に「文学」の問題として考えるとき、論点は「政治と文学」および「作家大城立裕の〈日本〉志向」と言うことになるだろう。（『琉球新報』2000年11月6日）

太平洋戦争において日本で唯一の地上戦を戦った地であり、その後米軍支配を受けているという特別な政治環

境にあった沖縄で、新川の沖縄の状況をどうにかしたいという思いは切実であった。また、文学においても、これだけ特別な傷を負った沖縄であるからこそ、日本本土とは違った特殊な文学が産まれて来るという期待があったということは、先に引用した「戦後沖縄文学批判ノート」などからも分る。しかし、更に、新川の意見を注意深く読むと

この場合、その文学表現が、必ずしも直接的な批判やたたかいであることを必要としないのは言うまでもないし、この方法がゆがめられ、文学が一つの非人間的な政治に対するため、他の政治思想にまったく隷属する形となれば、これはいわゆる芸術の俗流政治主義として誤りとなろうことも無論である。

という意見に注目せねばなるまい。これは、大城の意見と通じるものがあるからである。大城は政治を扱うことそのものを否定しているのではなく、偏向する姿勢について批判しているのである。『琉大文学』に対する大城立裕の評価は必ずしもマイナス評価だけだったのではない。批評や論文等に対しては評価を与えている。その上で、しかしながら優れた創作作品が出なかったことを憂い、政治問題を意識しすぎた作品のほとんどが「文学的感動を離れた政治的抵抗のおし売り」にしかならなかったと述べているのである。新川は、同論文で

大城氏はその小論で、社会主義的リアリズムを口にしていた当時の琉大文学の連中は悉く主体性を欠いていたもので、「病」にかかっていたと断定、当時の歩みは文学的に自己内部にとって有害であったときめつけた。そしてそれゆえに、今回の再刊を「転機」として主体性をもて！と励ましているのだがこれはおかしい。

大城のいう主体性とは、『琉大文学』の社会主義リアリズムの思想に対して発せられた言葉でもあり、作家一人一人に対するものでもあった。大城は『琉大文学』の主張する社会主義リアリズムが借り物の思想であり、内部から湧き出てきたものではないとしている。そして評論にも創作にも、自分自身の言葉が描かれていないことに不満を持っていた。池沢聡（岡本恵徳）が『琉大文学』10号（1955年2月）において自らの技術の悩みを「同人室」にて発表した後に、『沖縄文学』創刊号の座談会で新川は池沢に対し「実存主義的な傾向が未だ充分克服されず残りカスとして残っていた」という批評を行っ

た。大城はこの発言を取り上げ、「もし池沢君が、自分の歩みをそれ自体の中で尊重せず、むやみに他の基準をもってきて『残りカス』だと思い込もうとすれば、文学をする上でこんなに危険な事はない」と指摘している。『琉大文学』同人の他律的になりがちな価値判断こそが、『琉大文学』のもつ「病」であるとしたのである。大城の言う「病」は6号(1954年7月)の「同人室」にも見られる。大城立裕が5号(1954年2月)において「創作らしい雰囲気を持つのは「松助の自伝」だけか」と評した原龍二の「松助の自伝」『琉大文学』第4号(1954年1月)を取り上げ新井暁(新川明)が、原の文学手法を批判している。

大城氏の「創作らしい雰囲気は持つ」との評や、そのテーマ或いは作品自体の巧拙は伏せておくとして、作品があのような創作方法を取ったことの、方法論的な立場からは、作者個人にとっても危険でさえある、重大な問題があるだろう。(中略) 吾々の表現形式(スタイル)は、テーマ、それ自体と、それに付帯する内容としての諸条件によって規定される必然性によって設定されるべきだと思うので。

新井(新川)がここで、テーマには触れないとしているので筆者も敢えて触れないこととするが、テーマ云々ではなく、方法に問題があるとするこの評からは『琉大文学』が、個々の作家の自主性を摘み取った可能性があるという読みができてくるのである。新川は以下のように続ける。

とにかく吾々の標榜する琉球に於ける新しい文芸の開拓え(ママ)の努力も、既成文壇え(ママ)の反発と抵抗も稚なりに作品を通して為せねばならぬだから吾々自身のきびしい自己批判と強固とした自づ(ママ)からの文学理念の確立に努めつゝ、為されなければならない。

このように『琉大文学』は、同人が足並みそろえて同じ方向へ向かっていこうとするのである。このように『琉大文学』(雑誌本体)に戻ったとき、大城立裕の言う「主体性」というものが捉えられるのではないか。個々の文学的な手法を封じてまでも「思想性」を尊重する新井(新川)はじめ『琉大文学』の姿勢を問うたのである。大城は後に『琉大文学』を以下のように評している。

一九五三年に創刊した『琉大文学』が、まもなく社会

主義リアリズムを輸入することで、沖縄に抵抗文学の旗じるしをかけた。その理論はともかくとして、作品はのこるべきものがほとんどないが、沖縄のリアリズムはアメリカへの被害者意識をぬきにしては考えられない、という風潮をつくった。戦前からの被害者文学の系譜につながるといってよい。私の「二世」(一九五五)「カクテル・パーティー」(一九六五)は、それを脱け出るためのささやかな試みであった。(『西日本新聞』夕刊 1978年3月27日)

大城立裕の小説作品を見ると『琉大文学』との論争以前は、新聞紙上に娯楽のための掌編小説を発表することも多かったが、論争のあった1957年以降は、「二世」や「棒兵隊」「小説 琉球処分」というように、沖縄の歴史、文化、政治的状況を積極的に取り入れていくようになる。大城自身が認めるように、『琉大文学』は少なくとも大城のその後の文学方針に影響を与えたと言ってよい。また、大城立裕の代表作である「カクテル・パーティー」を大野隆之は先の稿で以下のように位置づける。

自己の理念の相対化を、意識的な方法として切り開いていったのが、大城立裕である。大城は図式に陥りかねない危険を冒しても、相対主義を貫こうとする。その典型が「カクテル・パーティー」であろう。沖縄人、中国人、日本人、アメリカ人4者が、それぞれの背景と理念をぶつけあい対立葛藤する。そしてその葛藤を通じて、新しい自己と出会う。これが「カクテル・パーティー」の枠組みである。また、これが「単声的」な「社会主義リアリズム」に対する大城の回答であった。

『琉大文学』は、「大衆のため」の文学を提案するも、結局それがどういうものなのか作品で回答を出すことはなかった。それに対し大城は、文学のモチーフとして沖縄の政治的状況にも目を向けるようになっていった。その結果うまれた「カクテル・パーティー」が芥川賞を受賞するのだが、それは同時に『琉大文学』が否定した大城の手法で文学に政治を取り入れることができるという事の実証でもあった。

一方、『琉大文学』の主張は、当時どのように受け止められたのだろうか。『沖縄文学』創刊号(1956年11月)において行われた座談会「出発に際して」(出席者 太田良博 大城立裕 新川明 池田和)のなかで『琉大文学』の果たした役割について意見交換をしているが、新川明の「政治と文学」を結び付ける主張に対し、詩人で

あり小説家でもある池田和は、「新川君の主張する事も大切ではありますが、それはあくまでも時代主張であって、文学はむしろもっと普遍的なものではないかと思います」と意見を述べている。

また、岩波講座『日本文学史』第15巻（1996年5月）で、目取真俊が書いた『琉大文学』についての意見は、『琉大文学』同人である新川明や川満信一らによる『琉大文学』での戦後の沖縄における文学状況への批判を踏まえた上で、次のようにまとめている。

『琉大文学』同人の批判は、書き手たちに大きな影響を与える。その批判に同調するにしろ反論を試みるにしろ自らの作品への反省と創作への方法的模索を促さずにはおかなかった。特に大城立裕や池田和、太田良博といった若い書き手たちは、積極的に反応していく。一方、『琉大文学』同人にも、政治的主張に傾きすぎて作品の実作が伴わない、という批判が行われる。『琉大文学』は批評と詩の分野では多くの成果を上げたが、小説においては、大城らの批判のとおり、沖縄の文学活動に刺激を与えるような作品や新しい書き手を生み出す事はできなかった。

しかし、『琉大文学』をめぐるこの論争は、大城立裕が1996年新聞紙上に、先の「光源を求めて」の中で、『琉大文学』にふれたエッセイを掲載したのをきっかけに、新川が著書『沖縄・反逆と統合』（筑摩書房 2000年6月）のなかの「大城立裕論ノート」において反論する形で再燃する。大城立裕の意見は、当時と変わらず、『琉大文学』が、当時既成の小説家から短歌や絵画の世界にいたるまで、その「影響は大きかった」と認めたうえで、「その文学に対する貢献」を疑問視するものであった。これに対し新川が反論するのであるが、同論文の中では、大城立裕の文学の中身についても、『琉大文学』の活動の中身についても十分に述べられていない。新川の論文の目的自体は「もう一つの大城立裕像を明らかにすること」とし、以下のとおりであった。

しかし人間の全存在は“光り”（「正」の部分）だけで形成されるはずはなく、“光り”があれば“暗部”（「負」の部分）もある。私が本稿ですすめている作業は、大城の“暗部”の一隅を照射するささやかな試みにすぎない。このように“暗部”を照射する作業がさらに行われ、光り輝く像と対置される時にはじめて、言葉の正しい意味における「全体像」は視えるにちがいない。

このように、人間としての大城立裕像の負の部分を描こうとしたこの論文の中身は、大城の作品に対する評価はほとんどなく、エッセイや言動を批判したものであった。しかし、この新川の論文こそ現代沖縄における文学論争の性格を見ることができないか。

新川はこの論文を書くきっかけについて以下のように述べている。

「光源を求めて」の連載中も、連載が終わって単行本として刊行された時にも、多くの人から「反論を書け」「書くべきだ」と言われ、ある雑誌の編集者から電話で反論を求められたりもした。私はそれらの求めに一切応じなかった。（中略）なぜ、直ちに異議申し立てをしなかったのか。その理由は、刊行された本の「あとがき」にこの文章（「光源を求めて」）を書いたのは「沖縄タイムスから勧められ、・・・」とあったからである。

新川は、沖縄タイムス社で編集局長、社長、会長を歴任しており、「光源を求めて」が発表された時、沖縄タイムスを辞職して2年ほどしか経っていなかった。新川は、このような状況で、反論を書くことが、古巣に迷惑を与えまいかと懸念し、ためらったという。新川の憂慮からは、沖縄という閉ざされた島国の中で、発言する事の特異性が見られるのではないだろうか。しかし「反論する」と決めた新川の主張はかなり痛烈なものであった。

大城は五〇年代に、『琉大文学』の主張（政治的アンガージュマン＝政治への意思的実践的参加）から受けた一定の影響を、なんとしても認知したくないのである。認知したくないだけでなく『琉大文学』そのものを抹殺したい衝動に駆られているのである。

と述べ更に

大城には、彼が書くエッセイの類から読み取れるように、沖縄の戦後文学は大城一人で切り拓いてきたのであり、そこには何ものの影響も示唆を受けていない、という妄念がある。

とまで断言している。ここまで述べる根拠のひとつとして、

大城のすべてのエッセイに共通して見られる特徴的な

現象は、沖縄を語り、沖縄文化を語る時に、あらゆる場面、事象の説明資料として自作品が頻繁に引用されることである。ひとつの方法とはいえ、頻出する多用ぶりはいささか異常な印象を読者に与えずにはおかない。それはおそらく、ひとつには戦後の沖縄文学を切り開き、作品によって体現してきたのは己一人だ、という自負によるのであろう。

大城立裕が戦後沖縄文学に与えた影響は大きく、大城立裕の芥川賞受賞という文学的な貢献があったことによって、沖縄の文学界も活性化したというのは認めざる得ない事実であり、その結果沖縄文学の第一人者となったことも沖縄文学史を辿れば分る事である。第一人者としての自負は大城立裕自身にも当然あったと思われ、新川の言う事もあながち間違いではない。大城立裕は、1997年におこなわれた「沖縄文学フォーラム」の中で次のように述べてもいる。

私は私小説を書きません。他人はそれを不思議に思うようですが、私にとって沖縄の歴史や民俗を書くことが私小説に相当していると思います。沖縄の戦後を生きて、沖縄がどうしてもこんなにも苦労しているのかを考えたあげく、沖縄の民俗、それと歴史に関心が向いてきました。（『沖縄文学フォーラム報告書』1997年）

戦後沖縄文学史を鳥瞰した時、客観的に大城が戦後沖縄文学を支えてきたという事が見えるはずであり、それ以前に戦後沖縄文学を代表する作家がいなかったのもまた事実である。大城の小説作品はすべて沖縄を題材としており、大城の目指す小説表現は沖縄抜きには成しえなかった。

大城立裕のモチーフは、政治的状況や沖縄戦、シャーマニズムといった沖縄独特のものから、日常の些細な場面まで多岐にわたっており、沖縄の生活場面のあらゆる側面を切り取ってきた。大城の主要な作品の発表の場は「カクテル・パーティー」以降、『新潮』や『文学界』、『文藝春秋』、『すばる』といった中央雑誌であった。その大城にとって沖縄を意識するということは同時に他者<本土>と向き合う作業でもあったのだ。

4. 論争の再燃

『うらそえ文藝』第10号（2005年5月）は10周年記念特別号として、「沖縄近代文学 社会状況の狭間から——戦後文学への歩み」という座談会を特集として組ん

だ。出席者は大城立裕、船越義彰、仲程昌徳、星雅彦（司会）、戦後沖縄文学を総括しようと試みたこの座談会では、当然のように戦後沖縄文学の基礎となった『琉大文学』についての言及がなされた。¹⁴この席で大城は、現代沖縄の文学状況を『琉大文学』の時代を髣髴させるものとして以下のように語った。

私はね、文芸時評などで基地を含めての政治状況にからめてのみ、文学を語ることが多くて、これは『琉大文学』の再来だと、近ごろ危機を感じているんです。そうなりがちな状況はよくわかります。わかりますけど、文学というものをもっと視野を広く、可能性を追求せんといけないと思うんですね

大城立裕の言う「『琉大文学』の再来」とは、同人の活動云々の話ではなく、文学思想の風潮をさしている。沖縄国際大学ヘリコプター墜落事件後、米軍基地問題が重要な局面を迎えた沖縄で、沖縄県民は改めて政治的な苦境を再認識しなければならなかった。沖縄全体が憤りを感じる中、文学者たちもまた基地問題に関する発言を活発化させていた。そのような状況で、大城は文学が政治の道具にならないよう警鐘を鳴らしたのだ。

大城は改めて、文学が政治だけに偏る事を危惧している。沖縄を扱う事は必然的に政治問題とも関わることであり、そのことはここまで小説を書き続けている大城自身が実感していることだろう。大城が伝えるのはなにも政治を扱うなという事ではない。大城は次のように述べているのだ。「政治を扱ってもいいけど、政治を突き抜ける人間の実存を書かなければいけない」と。

大城発言は、戦後60周年の節目において『琉大文学』の当事者や若い批評家までも巻き込んで、新たな論争を引き起こした。初めに反応したのは琉球大学助教授新城郁夫の「『うらそえ文藝』第10号を読んで」であり、この評論が新たな論争を起した。これは、同じく「うらそえ文藝」第10号に「目取真俊『水滴』論」を発表した、沖縄キリスト教学院大学講師浜川仁との論争である。以下両者の意見をまとめよう。新城郁夫は、『うらそえ文藝』の座談会について「感じたのは、相も変わらぬ『政治と文学』論の不毛さであった。」と感想を述べた上で、以下のように批評している。

大城氏の気苦労を思うと、同情申し上げるのが筋かとも思われぬのでもないのだが、しかし、今の沖縄の文学シーンをひととおりに眺め回してみても、残念なことに「『琉大文学』の再来」らしき動きなどどこに

も見あたらない。むしろ、この座談会において見出されるのは、ただただ大城氏の妄想的な危機感のなかに幻出する『琉大文学』の影の異様な大きさであって、その意味で言えば、『琉大文学』が大城立裕という作家を生んだ」という仲程昌徳氏の至極まっとうな見解を除いては、この座談会には何の新味もない。(中略)大城氏の『琉大文学』批判にしても、浜川氏の「水滴」＝「反戦平和小説」観批判にしても、『琉大文学』の実践が何であり、そして「反戦平和」の思想的内実がいかなる可能性を持つかなどについて一切の思考もないうまま、ただ性急にそれらを「政治」性の名のもとに退けようと躍起になって、結局は墓穴を掘っているばかりなのである。むしろ、彼らは、自らが捏造し批判しようとする「イデオロギー」そのもののなかに自ら幽閉されていると言うべきであろう。(『沖縄タイムス』2005年5月27日)

言うまでもなく、「花鳥風月」的美意識は、心性的統合のために「国民」を国家イデオロギーのもとに束ねる点において日本ナショナリズムの中心性を構築してきたのであり、その意味から言っても、どう否認しようとも、文学的次元と政治的次元とは分離不可能なのである。(『沖縄タイムス』2005年6月16日)

一方、浜川の意見は以下の通りである。

しかし、大城立裕氏をはじめ、私たちはおのおのの問題意識を各自誠実に表現してみようとしたまでだ。そして、大城氏にははるかに及ばずとも、私もまたある種の社会的責任感をもって、自分の問題意識と取り組もうと常々思っている。(中略)日本文学と比べて、沖縄文学は政治色が濃いと言われる。だがそれは、政治的でなければ立派な沖縄文学とは言えない、ということでは決してない。作家が描くのは政治的心情などではない。我が郷土の書き手が描こうとし、また描き続けているのは、たまたま政治的であるところの驚くほど矛盾に富んだ生々しい現実である。そこに散らばる言葉の切れ端を集め、詩を編み、物語を織ることこそが沖縄文学の務めである。(『沖縄タイムス』2005年6月5日)

新城氏が、文学に抵抗を見たいのなら見るがいい。それはもとより本人の勝手である。しかしだからといって、それを見ない者に社会的責任が欠けているなどと言うなら、それは単なる言い掛かりというものだ。

(『沖縄タイムス』2005年6月27日)

ここで、双方の主張に注目すると、文学は政治の為のものではないと文学そのものを尊重する浜川と文学が政治の為にもっと関わるべきだと主張し始めた新城の一連の論争はいわば大城立裕と新川明の代理論争であり、この論争は、沖縄文学界にとって久しぶりの刺激となった。この問題に触れて、詩人であるおおしろ健が『沖縄タイムス』(2005年6月12日)で以下のように述べた。

座談会だけでなく、文学と政治を切り離そうとする風潮も気になる。文学は政治的でもあるし非政治的でもある。線を引くこと自体にある意図を感じる。

更に直接この発言に触れる形ではないが、川満信一までも過去の大城立裕の『琉大文学』への評価について、発言すると言う事態になった。¹⁵半世紀以上前の出来事になお、新鮮に議論されるということは、沖縄の思想風土の活発さを反映しているのであるが、しかし、時間の経過とともに真実から遠ざかったところでの議論になっている。その典型が川満信一による批評である。川満信一は、沖縄タイムスの戦後60周年企画「記憶の声・未来への目」¹⁶において、「無常の軌跡(上)」(2005年9月6日)の中で大城立裕を取り上げ、「文学と政治」提起に疑問として、「文学的思春期に」を批判した。やや長いがそのまま引用する。

『琉大文学』が創刊されたのは、一九五三年七月であった。創刊号にはクラブ顧問の中今信(故人)、詩人の新屋敷幸繁(故人)が寄稿し、作家の大城立裕氏が「文学的思春期に」のタイトルで書いている。当時、大城氏については、ほとんど知らなかったが、その文章を読んだ時は、老成した作家の後輩に対する「教訓」という視線を感じた。そのなかで、文学の目的とか、「文学と政治」の問題が提起されたのだったが、なぜあのころ、この主題があえて提起されたのか、いまもって納得できない。大城氏はその後も折にふれ、「琉大文学派？」の政治的偏向を批判しており、最近もまた、『うらそえ文芸』の座談会で言及し、タイムスリップしたような「政治と文学」論争の火付け役を演じている。『琉大文学』創刊のころは、冒頭にふれたようにメンバーのまとまりもなく、方向も定まらず、あえていえばセンチメンタルと自棄の反抗が共通のベースになっていた。太宰治や坂口安吾が読まれていたようだが、それらの文学思想がどの程度まっとう

に消化されていたか、はなはだあやしい。そういう状況のなかで、なぜ、大城氏は文学の目的性とか、政治性の問題を取り上げたのか。『琉大文学』の内容が、伊佐浜、伊江島土地闘争にかかわりながら、反権力の抵抗性を前面に出すのは六号からである。すると、大城氏の創刊号の文章は、二通りの読み方が出来る。一つは、『琉大文学』の後々の反権力的変貌を透視した予見的問題提起だったという読み方。いま一つは、自分の文学活動は非政治的であるということを、時の絶対権力である米占領軍に対して、暗に示そうとした、という、勘ぐった読み方。

既に述べてきたように、「文学的思春期に」は、大城が自らの文学目標を掲げたエッセイであり、創刊を迎えた『琉大文学』については一言も言及していないのである。そのことに対して、以上のように強い不快感を露にした批判をしている。具体的に大城が『琉大文学』について述べたのは、『琉大文学』第5号（1954年2月）において「現段階の言葉」が初めてであった。それまでは、『琉大文学』がどのような作品を残すかということを静観し、2巻2号（1957年4月）において「主体的な再出発を」を寄せたのである。川満のこの稿は、時制や、取り上げた作品内容の検証が明らかに不十分である。川満にとっては大城が根本から『琉大文学』を批判したという事実だけが強烈に残っているものであり、記憶だけで語られたものだろう。

しかし川満の不満の矛先は、本当は別のところにある。「無常の軌跡（下）」（2005年9月7日）での以下の発言である。

特に「琉大文学」に言及するときの大城立裕氏は、詩やエッセーなどの仕事はまるで「文学」の内に入らないかのような口振りで語っている。（中略）小説以外は「文学」ではないような雰囲気醸成し、文学のカテゴリーをせばめているような印象を与えるのはどうもすっきりしない。

確かに大城が『琉大文学』を語るとき、「作品」＝「小説」として限定している部分がある。創刊当時のメンバーである新川明、川満信一、そしてそれを引き継いでいった清田政信、中里友豪や新城兵一らは戦後沖縄詩壇をリードしてきた重要な人物である。『琉大文学』の功績は彼等を輩出したことにあるといってもよい。

川満と大城の立場については、大野隆之が2005年11月19日に行われた「第27回南島文化市民講座」のパン

フレットに、レジュメとして寄稿した「沖縄戦後60年—文学と状況」において少し触れている。大野は「大城立裕とは肯定的にであれ、否定的にであれ、必ず対峙しなければならない巨大な存在であった」とし、『琉大文学』に寄稿した「文学的思春期に」を取り上げ、「これに対して、最近誤謬の多い批判が出された。」と述べ、以下のように大城の立場を整理した。

ここで大城の言っている事は単純明快である。従来社会性が希薄だった文学に、社会、民族や政治といったモチーフを取り入れる事は重要である。しかしそれを政治の手段にするプロパガンダを否定しているのだ。（中略）例えば「カクテル・パーティー」一作だけを読んだとしても、大城が政治を忌避しなかったことは明らかなのである。

これに対しすぐに反応したのは、文芸評論家の比屋根薫である。比屋根は、『沖縄タイムス』（2005年11月30日）の文芸時評欄において

パンフレットを読むと大野隆之の大城立裕と『琉大文学』とのかかわりで、大城立裕こそ戦後沖縄文学の最大の表現者である、というのはその通りで異論はないが、川満信一の「無常の軌跡」(沖縄タイムス九月六日付朝刊)を誤謬が多い批判、誤っている、と書く研究者の文章はさびしい。そこには若い新川明、川満信一、岡本恵徳、いれいたかし、儀間進、清田政信、中里友豪などが生きた時代状況への配慮が欠けている。

と非難した。『琉大文学』は、当時発行部数500部という小さな同人誌であった。それ故に現在では公的機関においても揃って納められていることはなく、現物を確認する事も難しい。論争が再燃する中で、『琉大文学』自体が一種の伝説的な存在に祭り上げられてしまったという現実があり、実績以上の評価を得てしまったのではないだろうか。このことに対し、反論や検証はみられず、活発になった論争もこれ以上の展開は見られなかった。

5. まとめ

かつて沖縄文学の中心となった『琉大文学』と沖縄文学のバイオニアとなった大城立裕の論争は、戦後方向性を模索中であった沖縄文学に影響を与えた重要な論争であった。

大城立裕と『琉大文学』同人たちは、両者とも、表現

の方法は異なっても沖縄文学を成長させてきたことには変わらない。『琉大文学』は、戦後沖縄文学に対し思想的な問題提起を試みてきた。『琉大文学』の問題提起は、沖縄文学のあり方を作家自身に問いかけるものであったとして、有効であったといつてよい。

一方、大城立裕も『琉大文学』の思想を否定しつつも、『琉大文学』の思想を突き抜ける作品を作り上げてきた。論争以降の大城のテーマが、沖縄の内実を取り上げるようになってきた事実からもわかるように、思想的な指針は『琉大文学』との論争で決定付けられた。

大城立裕と『琉大文学』同人は、両者とも沖縄文学の発展を目ざすという目的は同じであっても、その方法論が全く違うものであった。大城立裕の文学的な営為は、沖縄内ではなく、むしろ本土（ヤマト）に向いており、外向的なものであった。それに対して、『琉大文学』は、沖縄の文学者たちに向けての提言や、または自らの同人に向けての働きかけであり、目的のベクトル自体が反対であったといえる。

沖縄は、大城立裕の後に芥川賞受賞作家を三人も輩出しており、かつての「文学不毛の地」という雰囲気は微塵もない。文化的な土壌も豊富である沖縄において益々文学に対する期待は高まるであろう。しかしながら、めまぐるしく変化する政治的状況や、未だ抱える基地問題など環境においては厳しさが残っている。その状況下で、文学者は、これからも必然的に政治的状況と対峙しなければならない。文学者が沖縄の政治的状況とどう対峙していくべきなのかという「問題」を発見したところに『琉大文学』論争の意義はあったといつてよい。

『琉大文学』論争は、思想対立であったということから、それぞれの執筆意図とは違ったところで論じられていたものもあったが、本稿では、当時の文献を中心に事実関係を検証した。しかし、沖縄において政治的困難が続く限り、文学者たちは何度もこのアポリアに突き当たるだろう。「政治と文学」の問題は、これからも状況に応じて議論され、深化されなければならない。これは今後の研究課題としておく。批評活動が活発であってこそ小説家を育てる。『琉大文学』同人と大城立裕の関係がそれを示している。

¹ 反復帰論や反国家論とは、新川明を筆頭に1970年前後展開された思想であり、従来までの沖縄の独立論や復帰論を拒否するものであった。

² 『琉大文学』そのものをテーマとした論文として、まとまったものとしては、この2編が挙げられるが、仲程昌徳の「沖縄現代小説史 戦後から復帰ま

で」（『沖縄文学全集』第7巻小説Ⅱ 解説 国書刊行会 1990年）など、沖縄文学史をテーマとした論文に『琉大文学』を取り上げることは多い。

³ 鹿野政直の「異化・同化・自立」は、大城立裕論の中でも、未発表の創作ノートを含め、あらゆる作品を精読して書かれたものである。この論文を『琉大文学』同人の新川明は「大城立裕論ノート」『沖縄・統合と反逆』（筑摩書房 2000年）の中で、大城立裕の“顕示癖”の背景にあるものとしている。

⁴ 明治34年（1901）、日中友好のために人材を育成する目的で中国の上海に日本初の海外高等教育機関として設置された大学。日本の敗戦とともに閉学。大城立裕は大学閉学により帰国。

⁵ 初出：「光源を求めて」『沖縄タイムス』1996年1月4日～12月27日連載 単行本：『光源を求めて』沖縄タイムス社刊（1997年7月15日）

⁶ 『うるま新報』は、1946年発刊。米軍が敗戦で混乱した住民の為に、広報活動を行う必要から発刊した。1947年になるとわずかに詩やコラム等の連載を設け、自由投稿を受け付けるようになる。

⁷ 1948年から1949年にかけて、沖縄ではようやく住民に自由な企業活動が認められた。それに伴い沖縄タイムス社や琉球新報社から『月刊タイムス』『うるま春秋』が発刊された。

⁸ 1948年『沖縄タイムス』『沖縄毎日新聞』が発刊。『沖縄タイムス』は、現在も出版されているが、『沖縄毎日新聞』は廃刊となった。

⁹ 『琉大文学』創刊当時、沖縄は米軍統治下にあったため、同人たちは「琉球の文学」と表現しているが、現在、“沖縄文学”と認知されている為、本稿では沖縄文学で統一する。

¹⁰ 大正14年生まれのおきなを代表する作家。著書に『船越義彰詩集』『なはわらべ行状記』『きじむなあ物語』『スヤーサブロー』『狂った季節』『タロくんとキジムナーのジルー』等。第五回山之口獺賞、第十六回沖縄タイムス芸術選賞大賞（文学）受賞。

¹¹ 大城のこれまでの発言を鳥瞰してみると、大城が文学を指す場合に必ずしも文学全体を視野に入れているとは限らないということが分る。大城が文学を語る時、小説を主と捉えて詩の分野までの配慮をしていないという傾向はあるだろう。沖縄では、戦前から詩作活動は活発でありその分野においては、先代の功績はあったといつて良いが、小説については、作家は存在していたものの未だ沖縄文学界はこれといった実績がない状態であった。大城発言は小説中

心に発言したものであると推測できるだろう。

- ¹² この稿は、『琉大文学』に寄せられた大城立裕からの私信を許諾を得て転載したもので、大城が公の目に触れる事を前提としないで書いたものである。
- ¹³ 沖縄の代表的文学作品などを収録した全集(海風社企画、国書刊行会発行)。沖縄文学の基礎資料として広く活用されている。沖縄文学全集編集委員会により全20巻の計画で1991年に始まったものの、1997年に14冊目を発行後中断していた。しかし、同編集委員会は2006年2月に全集の発行を再開させることを発表している。(参考：『沖縄タイムス』夕刊 2006年2月7日)
- ¹⁴ 司会者星雅彦は、『琉大文学』には功罪というのがあると思うんですけども、どのようにお考えですか」と話のきっかけ作りをしている。
- ¹⁵ 他にもこの論争については、立松和平が、『琉球新報』(2005年6月6日)で発言している。
- ¹⁶ 沖縄タイムス 戦後60周年記念の企画。沖縄の著名人が、日替わりで戦後を回顧した。

【参考文献】

- 鹿野政直、『戦後沖縄の思想像』、朝日新聞社、1987年
清水孝純〔ほか〕、『近代日本文学史』双文社出版、1986年
岡本恵徳、『現代沖縄の文学と思想』沖縄タイムス社、1981年
岡本恵徳、『沖縄文学の情景』沖縄タイムス社、2000年
新川明、『沖縄・統合と反逆』筑摩書房、2000年
大城立裕『大城立裕全集』勉誠出版、2002年
新城郁夫、『沖縄文学という企て』インパクト出版会、2003年
『うらそえ文藝』2005年5月号
『沖縄文学全集』(全20巻)海風社
『琉大文学』(1巻1号～2巻12号)1953年～1957年
『沖縄文学』(1号、2号)1957年

(平成18年3月31日受付)

(平成18年6月29日採録)